恩納村の戦跡めぐり～喜瀬武原小学校～

6月7日、喜瀬武原小学校の児童を対象に戦跡めぐりが文化財係と村誌編さん室の案内で実施されました。

恩納村谷茶の山奥にある住民避難壕群へ行き、実際に壕の中に入るなど追体験をし、恩納岳を見わたせるところでは、當眞嗣長さん(字恩納在住)より戦争体験談をしていただきました。戦争体験の話に生徒さんは耳を傾けて真剣に聞いてくれていました。その後に、村内で5カ所確認されるトーチカの一つである瀬良垣ギナン原のトーチカに行きました。瀬良垣のトーチカは離れ小島にあり遠目での見学でしたが、みんなどこにトーチカがあるかすぐに気付いてくれました。トーチカとはロシア語でコンクリート製の陣地などを指すといわれています。

次に安富祖にある第二護郷隊の碑などを巡りました。その後、学校へもどり大城和子先生より教わりながら戦跡をみたことなどを基に戦争に関する琉歌の作成を行ったそうです。初めて壕を見た子もいたようで壕の中が狭いことを体験したり、お話の中から戦時中の様子を知るきっかけとなりました。　　(文化財担当　崎原)

▲谷茶の住民避難壕群

▲谷茶の壕に入り追体験

▲恩納岳の見える場所での戦闘体験談

▲瀬良垣ギナン原のトーチカ

▲恩納松下の歌碑の前にて

▲第二護郷隊の碑

ガリ版を寄贈いただきました。

この度、博物館に山田在住の方より、資料を寄贈していただきましたので、ご紹介します。貴重な資料をご寄贈いただきましたこと、この場をお借りして、感謝申し上げます。

今回寄贈していただいたのは「暁」というメーカーが発売していた「アカツキ謄写機」(写真1)という簡易印刷機です。一般的には「謄写版(とうしゃばん)」と呼ばれ、別名「ガリ版」とも呼ばれています。残念ながら、現在ではほとんど見かけなくなりました。

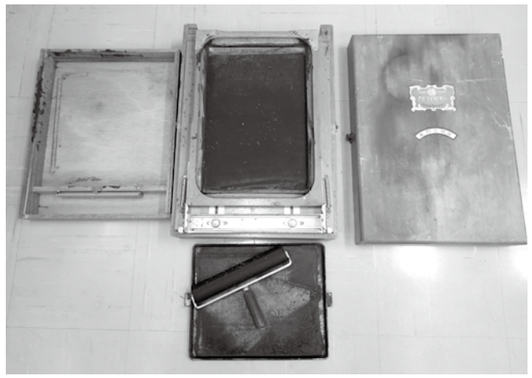

写真1　アカツキ謄写機(寄贈品)

気になる使い方ですが、まずロウ原紙(雁皮紙などの薄い紙にロウなどが塗ってあるもの)を鉄製のヤスリ(写真2)と鉄筆(てっぴつ)という専用の道具を使って印刷したい文章や図柄のとおりに削り取っていきます。このときにガリガリと音がするので、「ガリ版」と呼ばれるようになったそうです。ヤスリによって削られたところにたくさんの細かい孔があき、「透かし」の状態となります。後でインクを塗ったときにこの孔からインクが浸透し、印刷用紙に文字や図柄が印刷されます。このようにして印刷用の版を作ります。

印刷の際にはシルクスクリーンのような網(写真3)を取り付けた木枠の下に文字など刻んだ原紙を置き、網の上から伸ばしたインクをローラーで押し付けていくと開いている細かな穴からインクが浸透し、印刷ができるという仕組みです。

写真2　ヤスリ(恩納村博物館所蔵)

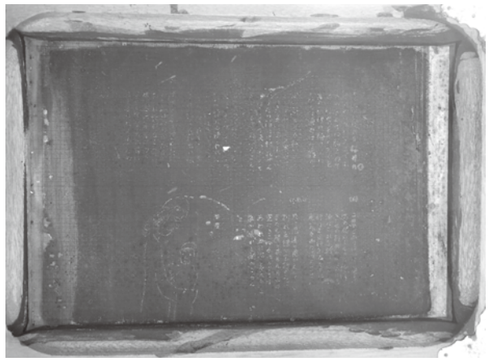

写真3　スクリーン(網)

謄写版は1894年に発明され、1980年代までは広く一般的に利用されていました。特に電気などを必要とせず、ロウ原紙とインクがあれば印刷が出来たので、公官庁や学校現場での印刷、チラシなどの配布物、演劇などの台本の印刷などにも利用されていたそうです。ちなみに、寄贈していただいたものの中には最後に印刷した際の版が残っていました。それによると最後に使用されたのは1982(昭和57)年だったようです。その後はワープロやパソコン、インクジェットプリンタの普及、コピー機の技術発展に伴い、現在はその役割を終えています。

博物館では製版用のヤスリは数点所蔵していますが、残念ながら鉄筆の収蔵品はありません。こうしたヤスリや鉄筆などはもう既に生産されておらず、ロウ原紙も入手をすることは難しい状況ですが、根強いファンもいるようです。博物館でも今回の寄贈を機に、少し調べてみましたが面白そうなので、かつての印刷技術である謄写版(ガリ版)印刷を体験できる機会を今後設けてみたいなと思っています。

(学芸員 後藤)